大学の世界展開力強化事業
（平成29年度採択）
平成30年度フォローアップ結果について

大学の世界展開力強化事業プログラム委員会

平成31年1月29日（火）

独立行政法人日本学術振興会

■フォローアップの目的

大学の世界展開力強化事業の適正な事業管理を行うとともに、
各大学における円滑な事業実施の支援、事業成果の還元のため、
毎年度各大学の取組の進捗状況を確認するフォローアップ活動を
行う。

＜参考：大学の世界展開力強化事業公募要領＞（抜粋）
５．事業の実施
（８）事業の評価等
毎年度ごとのフォローアップ活動（後述の「中間評価」実施年度は除く。）に加え、補助期間開始から３年目の平成31年度に中間評価、補助期間終了後（補助期間開始から６年目の平成34年度）に事後評価を実施する予定です。これらのフォローアップ活動及び中間評価の結果は、翌年度以降の補助金の配分に勘案されるとともに、事業目的、目標の達成が困難又は不可能と判断した場合、事業の中止も含めた計画の見直しを行うことがあります。これらの評価等については、委員会で定める評価方法、基準等に基づいて行われます。

スケジュール

・平成30年4月9日

フォローアップ実施について文部科学省から大学に通知

・5月23日～25日

大学からフォローアップ調査票の提出

・平成31年1月29日

プログラム委員会にフォローアップ結果の報告

・1月

フォローアップ結果の公表

■フォローアップの総括

平成29年度に採択された11プログラムについて、構想の進捗状況、特記すべき事項や設定した達成目標に対する実績（派遣・受入の学生数）等のフォローアップを行った。

事業開始年度である平成29年度は、連携大学と構想の実現に向けた活動とともに本格的な学生交流に向けた試行的な交流が行われており、また、事業全体の交流学生数は、多くのプログラムにおいて目標を上回っている状況にあることが確認できた。

各プログラムにおいては、引き続き目的に沿ってさらに取組内容を充実させ、成果を挙げていくことが期待される。

１．取組の進捗状況

「大学の世界展開力強化事業 平成29年度フォローアップ調査票」による各採択大学からの回答に基づき、以下①～④の観点における取組内容の進捗状況について、抽出・整理した。

① 交流プログラムの内容

② 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

③ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

④ 事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

① 交流プログラムの内容

タイプＡ（交流推進プログラム）

（主な交流先・ロシア：東京外国語大学）

長期派遣では、多岐に渡る業種・類型のインターンシップへの参加が、日露ビジネスの現場を学び、各人が伸ばすべきスキルやコンピテンシーを認識する良い機会となり、高い目的意識を持って留学生活を送ることができた。また、長期受入においては、日本語総合・技能科目（日本語学習プログラム）のほか、全学教養日本力科目により日本の文化（伝統芸能、俳句）及び社会関連科目、経済を中心に学び、理解が深まった。

（主な交流先・ロシア：東京工業大学）

短期派遣では、相手先であるロシアのトップ２大学で行われている研究活動等に関する知識を得ることができた。また、極めて活発な学生間交流となり、ロシア学生等との相互理解が深まった。今後さらにプログラム内容の見直しを行い、よりグローバルな視点で活動ができる能力の育成を促す。

（主な交流先・ロシア：金沢大学）

これまでの低温物理学分野での学生の双方向交流を一層促すため、博士前期課程におけるダブル・ディグリー・プログラムと単位互換プログラムを実施した。

（主な交流先・ロシア：東海大学）

日露首脳間で合意された８項目の経済協力プランに盛り込まれた「健康寿命の伸長」と「高いQOLを保つ健康長寿社会の創出」を医療現場で担うことになるライフケア分野の実務者人材の研修プログラムを提供した。特に、極東連邦大学生物医学部で学んだ本学医学部生は、臨床実習とともに我が国の健診、画像診断手法を現地で実践する北斗画像診断センターでのインターンシップを行った。

（主な交流先・インド：北海道大学）

派遣、受入前には、TV会議システムによる試行授業に双方の学生を参加させ、事前にプログラム概要や各校の情報、双方の言語・文化の基礎等について学生が学ぶ機会を設けた。派遣・受入期間終了時の学生による成果発表にもTV会議システムを用い、相互の教員による質問や総評等を交わすための仕組みを構築した。

タイプＢ（プラットフォーム構築プログラム）

（主な交流先・ロシア：〇北海道大学、新潟大学）

全国の日露交流の状況を把握し、個々の大学に対して事業への参画についての働きかけを行っているものの、各大学は、自校における日露交流の取組に注力しており、他大学との連携活動を主体的に行う余力がないという現況が浮き彫りとなった。今後は、プラットフォーム校である北海道大学と新潟大学が全国の日露交流についての橋渡しを行い、協力や連携の可能性を探っていきたい。

ロシア側の大学については、とりまとめのモスクワ大学とは十分に情報共有ができ、また、太平洋国立大学が幹事大学としての機能を果たすことが明確となり、同大学とも情報共有することができたものの、ロシアの他の大学とは十分な情報共有には至っていない。今後は、大学協会総会やウェブサイトの活用により、ロシアの大学に対する広報に努めたい。

（主な交流先・インド：東京大学）

採択校連絡会を開催し、本事業を実施している大学の関係者が一同に会し、採択校間でのグッドプラクティスの共有や、本事業の目的や今後の要望等について意見を収集するとともに、今後の活動等について意見交換を行った。また、本学インド事務所長も参加することにより、採択校の現地活動のための情報提供等を行った。

② 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

タイプA（交流推進プログラム）

（主な交流先・ロシア：千葉大学）

本プログラムへの参加学生には、各大学において事前学習、事後学習を行い、プログラムの成果が高まる様に指導している。受入プログラムは、初年度であったことから、各大学から３人以上の教員の参加により、プログラム内容の確認と今後の進め方の相談を行った。

（主な交流先・ロシア：金沢大学）

海外連携機関８機関から代表団が来日し、キックオフシンポジウム及び外部評価委員会を開催した。国内外から120名以上が参加し、今後５年かけて実施される本事業の取組を広く周知するとともに、各界からの意見を受けた。

（主な交流先・ロシア：近畿大学）

質の保証を伴うプログラムを実施するために、教育関係者、産業界の代表等日露双方の有識者による「外部評価委員会」を設置・開催した。

（主な交流先・インド：広島大学）

本学とインド６大学の国際教育交流の実務担当者によるILDP実務者会議を開催し、今後の学生交流プログラムの実施方法等について直接議論を行い、日印の大学間における学事暦及び成績評価基準の違いを関係者間で共有し、学生交流を推進する上での課題及び解決するための具体的議論を行い、その解決に向けて協力していくことを確認した。

③ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

タイプＡ（交流推進プログラム）

（主な交流先・ロシア：東京外国語大学）

ロシアで本学学生にインターンシップの機会を提供するに当たり、法的リスクについてのリーガル・メモを作成し、プログラム・コーディネーター、TUFS日露ビジネスネットワーク、在モスクワコーディネーター間で共有した。

（主な交流先・ロシア：〇長崎大学、福島県立医科大学）

JASSOの支援により受入・派遣学生の経済的負担が軽減され、学習に専念できる環境が整った。また、長崎大学において留学生や研究員を対象とするゲストハウスが竣工し、留学生の受入体制を整えた。

（主な交流先・ロシア：東海大学）

極東連邦大学から留学する海外研修及び健診人材実務者研修参加者向けのガイダンスや海外危機管理セミナーを開催した。加えて、渡航前教育の一部として留学の安心安全を担保するためサバイバル日本語講座を実施し、ロシア人学生の研修に取り組む姿勢及び危機管理に対する意識を高めた。

（主な交流先・インド：広島大学）

事業の推進及び実施のため、本学教職員がインドに拠点を持つ日系企業・団体を訪問し、学生交流プログラム実施への協力依頼を行ったことで、派遣プログラムの現地研修の一環として、実際に現地で活躍する日本人による講義及び企業訪問を実施することができた。

④ 事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

タイプＡ（交流推進プログラム）

（主な交流先・ロシア：千葉大学）

日本ロシア極東農業ビジネスフォーラムを千葉大学において開催し、両国から関係企業、大学関係者が100名以上参加し、本プログラムの事業内容を紹介した。今後のロシア極東との農業ビジネスの可能性を探ると同時に、インターンシップ受入などの連携の検討を要請した。

（主な交流先・ロシア：東京工業大学）

日露学生交流フォーラム、研究発表会、ワークショップ型研修等、派遣・受入の学生のみならず、日露両大学の他の学生も共に参加する交流プログラムが多くあったため、より波及効果の高い国際交流となった。

（主な交流先・ロシア：東海大学）

本事業専用のウェブサイトを開設し、英語・ロシア語・日本語の３言語による情報発信を行うプラットフォームを完備した。また、このウェブサイトでは、ソーシャル・ネットワーキング・サイト（Facebook、Instagram、Twitter）と連動させ、写真や動画も活用しながら広報活動ができる仕組みを整備した。

（主な交流先・インド：広島大学）

外部評価委員会において平成29年度における本事業の実施状況及び自己点検結果、プログラム改善について意見交換を行い、出席者から29年度に実施した学生交流プログラムに対する評価コメント及び事業の最終目標である「国際リンケージ型学位プログラム」の構築に向けた助言を受けることができ、30年度以降に実施する学生交流プログラムの改善や、事業全体の進め方に活かすことができた。

2．特記すべき成果

タイプA（交流推進プログラム）

（主な交流先・ロシア：千葉大学）

平成29年度は実施期間がおよそ半年の短期間にもかかわらず、沿海地方農業アカデミー、サハリン総合大学との間の受入では、インターンシッププログラムの試行を行うことが出来た。また、両大学からの参加も得て、千葉大学において日本ロシア極東農業ビジネスフォーラムを開催し、100名以上の参加を得て、日露の関係企業に本プログラムの事業内容を紹介できた。

（主な交流先・ロシア：東京外国語大学）

ロシアビジネスについて豊富な知見を有し、本事業の趣旨に賛同した本学卒業生を中心とする 「TUFS日露ビジネスネットワーク」の支援により、特にロシアにおける多様なインターンシップの実施を実現した。平成30年度以降は、日本国内でのインターンシップにもその協力が見込まれている。

（主な交流先・ロシア：〇長崎大学、福島県立医科大学）

初年度であり、実施期間も限られていた中で、予定していた学生の派遣を滞りなく行い、次年度以降の事業実施を行うための組織整備を、長崎大学、福島県立医科大学、北西医科大学の協議の下で行うことができた。

（主な交流先・ロシア：近畿大学）

「キックオフシンポジウム」では、「モノづくり」に関する日露双方の関係閣僚が出席し、日露モノづくり人材育成について討論を行なった。本学学生への教育のみならず、日露双方のマスメディアを通じて、日本とロシア双方への「モノづくり」人材育成、「世界展開力（ロシア）」の啓蒙・周知に取り組んだ。

（主な交流先・インド：北海道大学）

派遣・受入前の試行授業では、参加学生がプログラムの概要、派遣先の情報、相互の言語・文化基礎について学ぶことができた。特にIIT（インド工科大学）の学生には、本学での受入期間中に、外部講師による初歩の日本語・日本文化の授業を提供したところ、目に見えて周囲とのコミュニケーションが活発になり、インターンシップへの意欲を喚起することができた。

タイプB（プラットフォーム構築プログラム）

（主な交流先・ロシア：〇北海道大学、新潟大学）

日本側の大学59校へ日露交流に関するアンケート調査を実施したり、採択校連絡会開催に際して非採択校等にも幅広く参加を呼びかけた結果、採択校以外の大学・自治体等11機関を含む合計24機関に対して本事業について説明をする機会を得ることができ、日露交流の促進に向けて、国内の大学等の関心を高めることができた。

日露大学協会の加盟校は、平成28年度の設立合意時には42大学（日露それぞれ21大学）から８大学(日露それぞれ４大学）が新たに加盟することとなり、高等教育機関による日露交流・協力の基盤を拡充することができた。

（主な交流先・インド：東京大学）

11月にIIT（インド工科大学）カラグプールを訪問し、同校に所在する鉄道研究所を訪問するとともに、IITカラグプールで開催された留学説明会に参加した。同校の土木工学専攻長や教員と意見交換を行うとともに、本事業についての広報と協力を要請した。

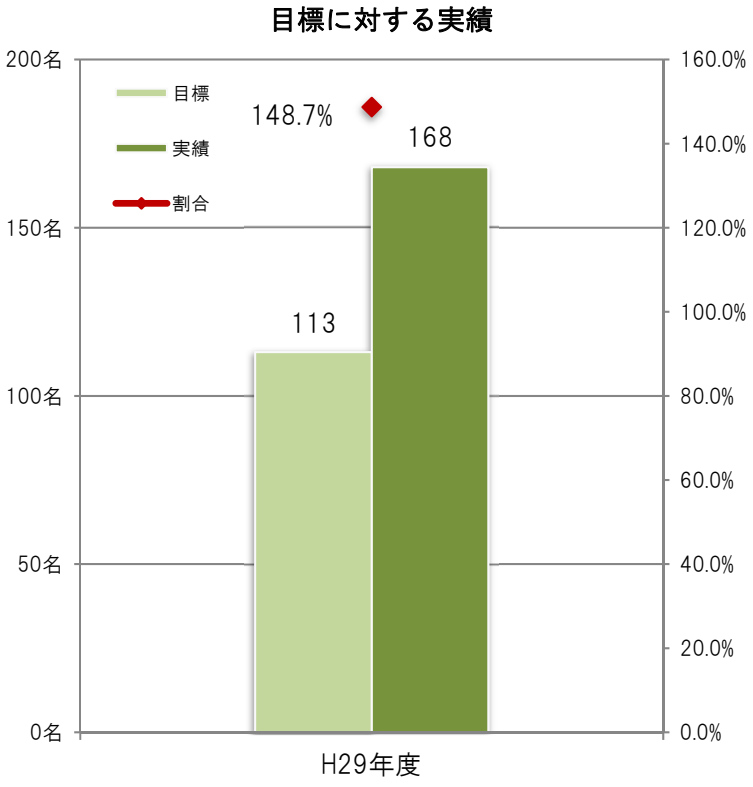
初年度から、展開力の採択校に限らずインド鉄道省国費留学生派遣参加大学やインド政府関係者等へも事業について理解を得ることができ、幅広く展開していくための足掛かりができた。

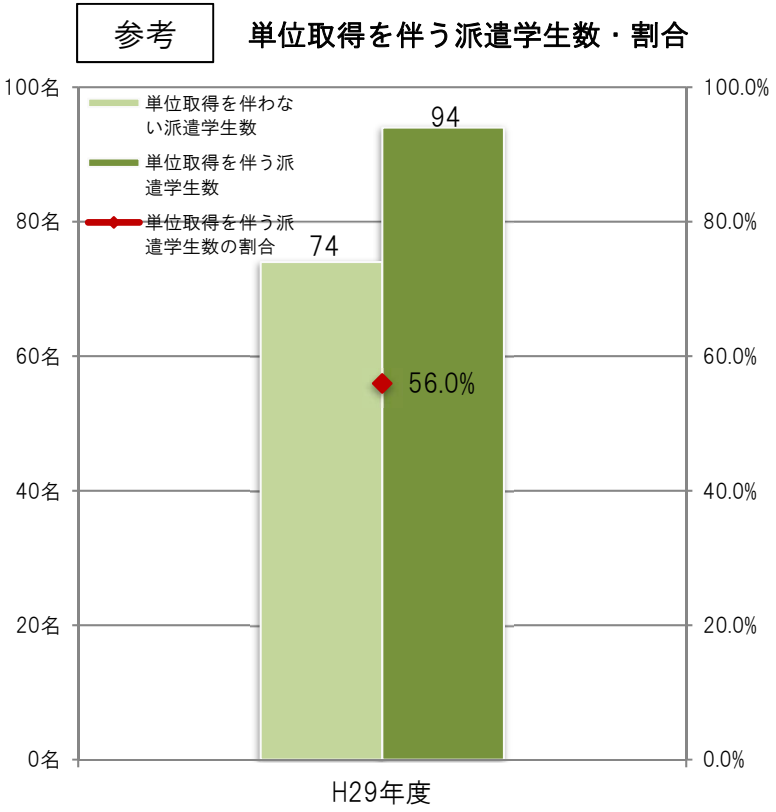
３．交流学生数の実績（１）

※タイプＡ（交流推進プログラム）の９プログラム

（１－１）交流プログラムで留学した日本人学生数（派遣学生数）について〈全体の状況〉

派遣実績は目標を上回っており、単位取得を伴う派遣学生は、全体の半数を超えている。



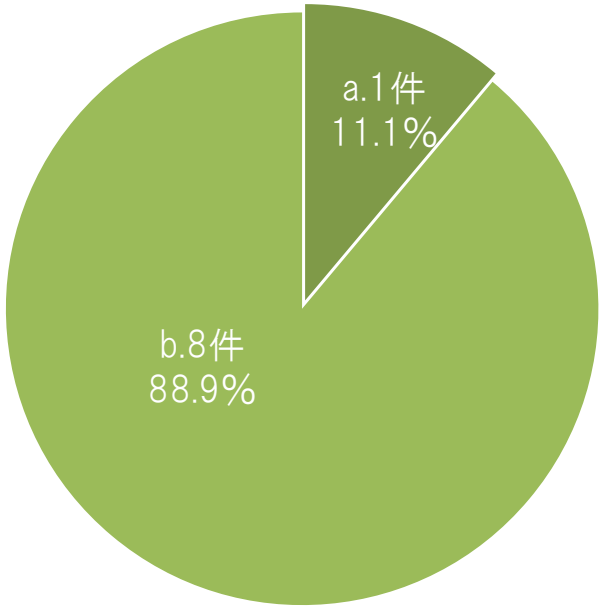


（１－２）交流プログラムで留学した日本人学生数（派遣学生数）について〈各プログラムの状況（平成29年度）〉

目標に対する実績の割合が

a. 200%以上

b. 100%～200%未満



※個別の派遣学生数の詳細は別表１参照

（１－３）交流プログラム（派遣）の進捗状況について （主な取組を抜粋）

【平成29年度の目標に対し実績が上回っている事業】

（主な交流先・ロシア：東京外国語大学）

短期派遣プログラム（夏・冬）に参加する学生数が、当初計画の13名より10名多い23名となった。 特に“Two Cities – Two Universities”というモスクワ大学とペテルブルク大学の２大学で学べるプログラムでは、４週間の留学で100時間の集中語学学習が確保されており顕著な学習効果が見込まれること、ロシアの伝統・文化に触れることができることから、学部前半の学生の間で根強い人気がある。派遣した23名全員が、留学に加え、留学前後教育に取り組み、２単位を取得した。

（主な交流先・ロシア：〇長崎大学、福島県立医科大学）

今年度は試行的な短期派遣であったが、派遣修士学生はセミナーを受講し、また現地学生と活発なディスカッションにも参加し、両国の放射線災害の認識の違いを学ぶことができた。次年度以降の本格的な単位互換に向けてはカリキュラムの構築等の実務的な課題はあるが、参加学生からは有意義であったとの高評価を得られた。

（主な交流先・ロシア：近畿大学）

短期人材交流派遣プログラムを実施し、モスクワ国立大学、ドゥブナ国立大学等の交流協定校におけるキャンパスツアー、 学生交流会、専門分野の講義、研究施設訪問等を実施したほか、ロシアに進出している日系企業４社（モスクワ及びトリヤッチ）を訪問し、それぞれの企業において研修プログラムに参加した。

（主な交流先・インド：広島大学）

平成29年度は７つの「日印教育交流パッケージ」のうち、Entry Courseの「専門外国語研修（ILDP-START+）」並びにIntermediate Courseの「キャリアデザイン（ILDP-Global Internship）」及び「日印協働研修（ILDP-International On-Site Training）」を実施し、合計27名（うち日本人学生23名）を３大学へ派遣し、プログラム修了者として認定した。

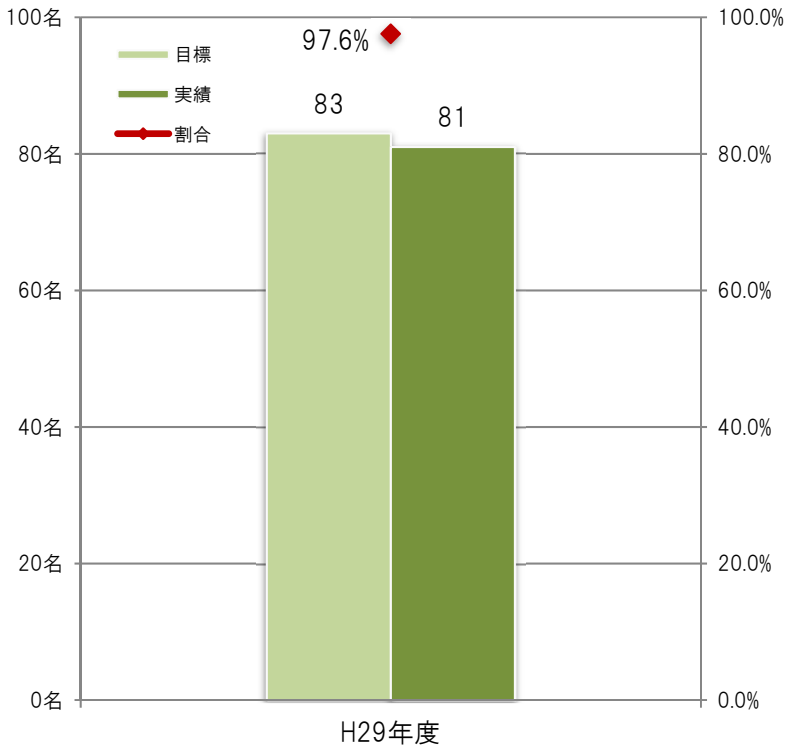
３．交流学生数の実績（２）

※タイプＡ（交流推進プログラム）の９プログラム

（２-１）交流プログラムで受け入れた外国人学生数（受入学生数）について〈全体の状況〉

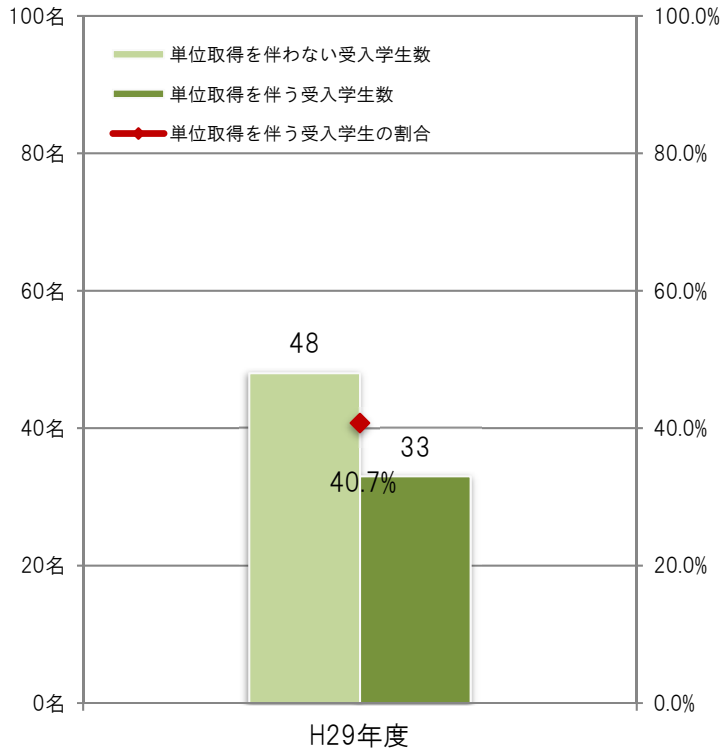
受入実績は、若干ではあるが目標を下回っている。

目標に対する実績



参考

単位取得を行う受入学生数・割合



（２－２）交流プログラムで受け入れた外国人学生数（受入学生数）について〈各プログラムの状況（平成29年度）〉

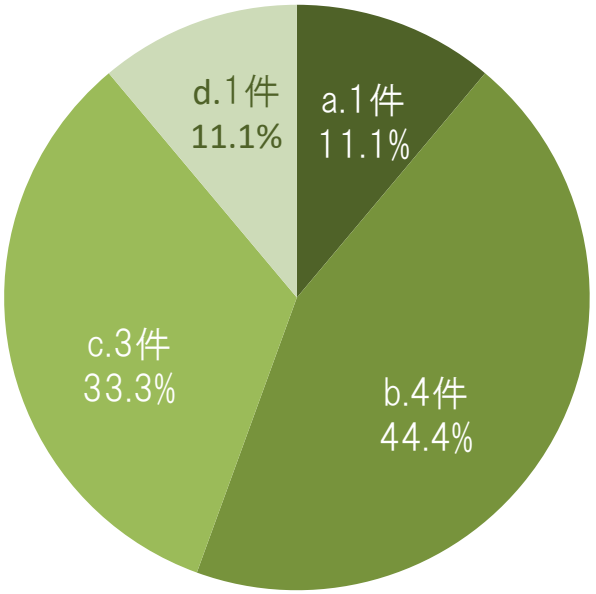
目標に対する実績の割合が

a. 200%以上

b. 100%～200%未満

c. 100%未満

d. 受入予定なし



※個別の受入学生数の詳細は別表２参照

（２－３）交流プログラム（受入）の進捗状況について （主な取組を抜粋）

【平成29年度の目標に対し実績が上回っている事業】

（主な交流先・ロシア：金沢大学）

平成29年度は、文化交流プログラムを通じて、目標を上回る学生を本学に受け入れることができた。全ての学生にとって本プログラムへの参加は自身の勉学にとって大変プラスの効果があり、将来どのようなアカデミックパスを歩むかや、どのような職に就くかということに関して役立ったといった評価を得ている。結果として、国立イルクーツク大学の学生が、プログラム修了後、金沢大学の修士課程への出願を決めている。

（主な交流先・ロシア：近畿大学）

短期人材交流受入プログラムを実施し、さらに東大阪市内のモノづくりの現場を視察した。このような場を通じて、ロシアからの受入学生には本学の実施するプログラムや「モノづくり」の本質を理解してもらうと同時に、本学学生に対してはロシアへの関心を高める契機となった。さらに、東大阪市内のモノづくり企業に対する本プログラムの理解にも繋がった。

【平成29年度の目標に対し実績が下回っている事業】

（主な交流先・ロシア：東京外国語大学）

本プログラムでは、短期受入は平成30年夏学期から開始するため、29年度は長期受入のみで、15名の計画に対して実績は８名であった。

（主な交流先・インド：北海道大学）

５名受入を計画していたところ４名・80%の達成率となった。初年度であり準備期間が短く、IIT（インド工科大学）ハイデラバード校とマドラス校から２名ずつ受け入れるにとどまったが、概ね予定していたプログラムを始動できた。今後に向けては、募集期間を前倒しし、期間も余裕を持たせ対応することで、さらに長期の受入ができるようにしたい。

別表1：プログラムごとの派遣学生数（平成29年度選定）

（単位：名）

	大学名	事業名	取組年度	合計人数 目標（計）	合計人数 実績（計）	達成目標に対する実績の割合（%）	（内訳） 単位取得を伴う派遣学生数（計） 目標	実績	3ヶ月未満 目標	実績	3ヶ月以上 目標	実績	左記以外の派遣学生数（計） 目標	実績	3ヶ月未満 目標	実績	3ヶ月以上 目標	実績
タイプA ロシア	千葉大学	極東ロシアの未来農業に貢献できる領域横断型人材育成プログラム	H29	6	10	166.7	6	6	6	6	0	0	0	4	0	4	0	0
			計	6	10	166.7	6	6	6	6	0	0	0	4	0	4	0	0
	東京外国語大学	日露人的交流の飛躍的拡大に貢献するTUFS日露ビジネス人材育成プログラム	H29	28	39	139.3	28	39	13	23	15	16	0	0	0	0	0	0
			計	28	39	139.3	28	39	13	23	15	16	0	0	0	0	0	0
	東京工業大学	健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム	H29	10	11	110.0	0	0	0	0	0	0	10	11	10	11	0	0
			計	10	11	110.0	0	0	0	0	0	0	10	11	10	11	0	0
	金沢大学	日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム	H29	20	38	190.0	20	38	20	35	0	3	0	0	0	0	0	0
			計	20	38	190.0	20	38	20	35	0	3	0	0	0	0	0	0
	○長崎大学、福島県立医科大学	日露の大学間連携による災害・被ばく医療科学分野におけるリーダー育成事業	H29	6	9	150.0	0	0	0	0	0	0	6	9	6	9	0	0
			計	6	9	150.0	0	0	0	0	0	0	6	9	0	9	0	0
	東海大学	ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成―主に極東地域の経済発展を目的として―	H29	15	15	100.0	2	0	2	0	0	0	13	15	13	15	0	0
			計	15	15	100.0	2	0	2	0	0	0	13	15	13	15	0	0
	近畿大学	日露間で活躍できるモノづくり中核人材の育成	H29	5	14	280.0	0	0	0	0	0	0	5	14	5	14	0	0
			計	5	14	280.0	0	0	0	0	0	0	5	14	5	14	0	0
	合計			90	136	151.1	56	83	41	64	15	19	34	53	28	53	0	0
タイプA インド	北海道大学	持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム	H29	5	5	100.0	5	5	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0
			計	5	5	100.0	5	5	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0
	広島大学	先端技術を社会実装するイノベーション人材養成のための国際リンケージ型学位プログラム	H29	18	27	150.0	3	6	3	6	0	0	15	21	15	21	0	0
			計	18	27	150.0	3	6	3	6	0	0	15	21	15	21	0	0
	合計			23	32	139.1	8	11	8	11	0	0	15	21	15	21	0	0
総計				113	168	148.7	64	94	49	75	15	19	49	74	43	74	0	0

別表1：プログラムごとの受入学生数（平成29年度選定）

（単位：名）

	大学名	事業名	取組年度	合計人数 目標（計）	合計人数 実績（計）	達成目標に対する実績の割合（%）	（内訳） 単位取得を伴う派遣学生数（計） 目標	実績	3ヶ月未満 目標	実績	3ヶ月以上 目標	実績	左記以外の派遣学生数（計） 目標	実績	3ヶ月未満 目標	実績	3ヶ月以上 目標	実績
タイプA ロシア	千葉大学	極東ロシアの未来農業に貢献できる領域横断型人材育成プログラム	H29	10	10	100.0	10	10	10	10	0	0	0	0	0	0	0	0
			計	10	10	100.0	10	10	10	10	0	0	0	0	0	0	0	0
	東京外国語大学	日露人的交流の飛躍的拡大に貢献するTUFS日露ビジネス人材育成プログラム	H29	15	8	53.3	15	8	0	0	15	8	0	0	0	0	0	0
			計	15	8	53.3	15	8	0	0	15	8	0	0	0	0	0	0
	東京工業大学	健康・医療産業や原子力・エネルギー産業を先導する日露工学系人材育成プログラム	H29	10	11	110.0	0	0	0	0	0	0	10	11	10	11	0	0
			計	10	11	110.0	0	0	0	0	0	0	10	11	10	11	0	0
	金沢大学	日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム	H29	5	6	120.0	5	6	5	6	0	0	0	0	0	0	0	0
			計	5	6	120.0	5	6	5	6	0	0	0	0	0	0	0	0
	○長崎大学、福島県立医科大学	日露の大学間連携による災害・被ばく医療科学分野におけるリーダー育成事業	H29	0	0	－	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			計	0	0	－	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	東海大学	ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成―主に極東地域の経済発展を目的として―	H29	15	15	100.0	2	2	2	2	0	0	13	13	13	13	0	0
			計	15	15	100.0	2	2	2	2	0	0	13	13	13	13	0	0
	近畿大学	日露間で活躍できるモノづくり中核人材の育成	H29	5	10	200.0	0	0	0	0	0	0	5	10	5	10	0	0
			計	5	10	200.0	0	0	0	0	0	0	5	10	5	10	0	0
	合計			60	60	100.0	32	26	17	18	15	8	28	34	28	34	0	0
タイプA インド	北海道大学	持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム	H29	5	4	80.0	5	4	5	4	0	0	0	0	0	0	0	0
			計	5	4	80.0	5	4	5	4	0	0	0	0	0	0	0	0
	広島大学	先端技術を社会実装するイノベーション人材養成のための国際リンケージ型学位プログラム	H29	18	17	94.4	3	3	3	3	0	0	15	14	12	14	3	0
			計	18	17	94.4	3	3	3	3	0	0	15	14	12	14	3	0
	合計			23	21	91.3	8	7	8	7	0	0	15	14	12	14	3	0
総計				83	81	97.6	40	33	25	25	15	8	43	48	40	48	3	0